



アフガニスタン山の学校だより

NO. 1

翼

ばあーる

ポーランドの小学校で、黒板の字を大きな声で斉唱する1年生
2002年6月

ごあいさつ

パンシール渓谷の3月、ヒンズークシの山々にはまだ雪が張りついているが、麓の村では、アンズの木に白や桃色の花が咲き始める。地面が見え始めた大地には、さまざまに「命」が芽吹き始めている。春の陽光の向こうに、畑の手入れを始める農民の姿や、冬の間に傷んだ家の修理をする人たちの姿が鮮やかに浮かび上がる。冬の3カ月間は休みだった「山の学校」も、4月から新学期が始まる。新しい椅子や机がそろい、扉がつき、窓ガラスも入った教室で授業を受けるのを、子どもたちは首を長くして待ちわびているに違いない。

もうすぐ私はアフガニスタンに向かう。「アフガニスタン 山の学校支援の会」に加わってくれた人々の熱い思いを一日も早く、子どもたちに届けたいと思うから。

とびっきりの笑顔を浮かべ口々に「来てくれたんだね」、「ありがとう!」と迎えてくれる子どもたちの姿が、今から目に浮かぶようだ。

山の学校と私たちの交流は始まったばかり。10年後、この子どもたちがどう成長して、どんなアフガニスタンをつくっていくのか。その日まで見守っていききたいと思う。

*

*

子どもたちがそれぞれの夢に向かって羽ばたけるようにと願いを込めて、会報の名前を『翼』としました。これからの10年を、山の学校の子どもたちとともに、歩んでいければと思います。

2004年4月

長倉洋海

椅子と机を子どもたちに向けて

「山の学校」支援にいたるまで

長倉 洋海



2003年9月、私は、アフガニスタン抵抗運動の指導者マスードの追悼記念シンポジウムに出席した後、ポーランド村の小学校を1年ぶりに訪れた。山道を何時間も歩いてやってくる子どもたちの姿や、授業を受けるその真剣な目が忘れられなかったからだ。

再訪した学校には、窓ガラスも扉もなかった。以前は暑い盛りで吹き込む風が涼しげでいいなあと思ったが、とんでもない間違いと気づいた。寒い日には、入り口や窓からは烈風や砂ほこりが容赦なく吹き込むし、放課後には、牛や羊が勝手に入ってくる。机がないために地面にはいつくばるようにして黒板の字を写している子どもたちの姿を見た時、「椅子と机を買おう」と思い立った。ちょうど、

日本を発つ前に二人の方から「アフガニスタンの子どもたちのために使ってください」と預かったお金があった。それを話すと、村人も先生も喜んでくれた。村に滞在中は、村人や先生の家を順繰りに泊まり歩いたが、皆、かつての戦争中と変わらないほどの質素な生活をしている。それでも、鶏をつぶし、最上の料理を作ってもてなしてくれた。彼らの自慢は、学校を村人が自力で建設したこと。「それまで、いろいろな外国人が来て援助を約束して帰ったが、届いたためしがないからだ」と言う。

翌日から、必要な椅子と机の数を計算し、扉と窓枠をつくってくれる大工さん探しを始めた。いったん首都カブールに戻って机と椅子を注文すると、再びポーランドに戻った。

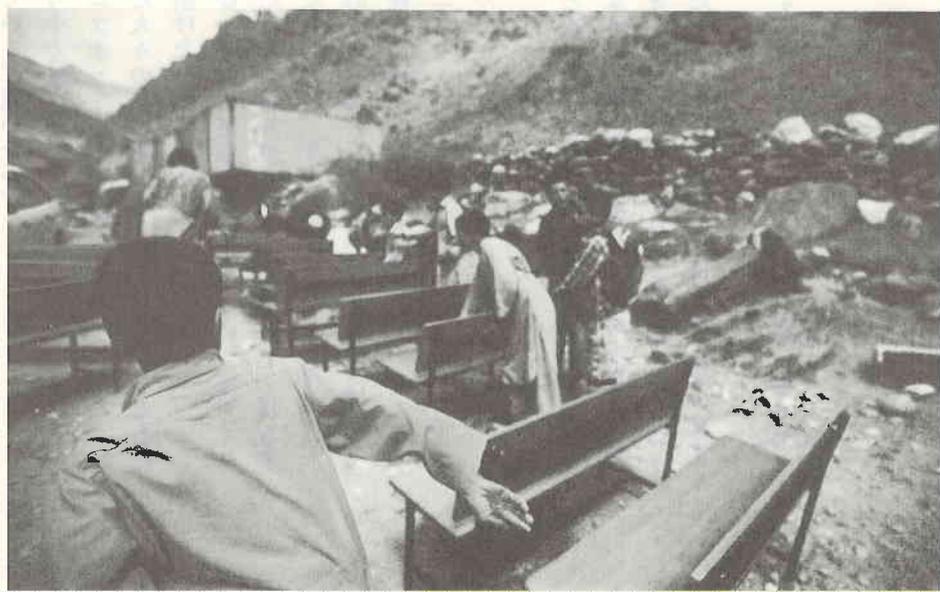
今度は校長のサファルが「政府の給与が3カ月遅滞しており、これ以上続けば、授業をボイコットせざるを得ない、何とか支援してもらえないか」と頼んでくる。本来なら政府の責任だが、国際支援が滞り、政府にも財源がないのだ。どんなに子どもたちが授業を心待ちにしているも、先生がいなければ始まらない。この時、日本で支援組織をつくらうと思った。その計画の中には、給与支援も入れよう。それはアフガン復興への一助にもなるはずだと思った。

さらに村人との話の中で、「中学ができないか」と相談を受ける。中学がないため、女の子たちが勉強したくても続けられないという。資材などの費用は200万円程度だというので心が動くが、「日本の支援者と相談して決める」と慎重に答えた。

が、その直後、ポーランド出身の人が勤めるカブールのNGO(独)のボスが建設してもいいと言っているという話が出てくる。それなら建設はそちらにまかせ、机や椅子、教材、そして、無給では成り手がないであろう教師の給与をこちらで支援できないだろうかと考えを切り替えた。

校長の推薦で、麓の町バザラックで教えている女性教師3人を面接。小学校の教師は男性ばかりで、これではせっかくの男女共学が泣く、女の先生が必要だと思っていたからだ。会ってみると、経験も豊富だし、考えもすっかりしている。午後は今までの学校があるが、午前中は教えることができると言うので、「春に来た時に最終決定をしたいが、準備をよろしく」と話す。

問題は女性教師の送り迎え。下の町から、山の学校まで歩く2時間。四輪駆動でも30分。毎日、車をチャーターするなら買った方がいいとまわりの人々が言う。ちょうどカブール在住の安井浩美さんの夫サブルが車のディーラーなので相談すると、「程度のいい四輪駆動の中古



待ちに待った椅子と机が届いた。
みんなでコンテナから教室に運び込む

車が100万円。5年は大丈夫」と言う。車があれば、送り迎えだけでなく、村に急病人が出た場合も使える。また、山の子どもたちは、ほとんど教科書以外に本を読む機会がないから、空いている午後、車での移動図書館ができないだろうかと思ふ。村人や先生には「主体はあくまで村人と先生たち。私たちの支援はその熱意への手助け」と何度も念を押した。が、実際に始めるとなると大変に違いない。私は年に一度は訪れるつもりでいるが、無理な時は、女傑ムルサル(安井さんのイ

長倉洋海 今後の活動

[写真展]

▶ コソボ写真展『ザビット一家 家を建てる』
 期間：4月22日～5月4日
 場所：新宿紀伊國屋画廊・東京
 電話03-3354-7401
 4/25・29・5/4の13時より作品解説あり

[写真集]

▶ 『涙-TEARS 誰かに会いたくて』
 PHP、1400円（3月発売）
 ▶ 『ザビット一家 家を建てる』
 偕成社、1800円（4月発売予定）

ポーランドの小さな仲間たち

ポーランド小学校の生徒は現在約150人
 その子どもたち一人ひとりにインタビューしました
 このコーナーでは、毎回彼らの元気な笑顔と夢をご紹介します



サレーマちゃん（8歳）2年
 好きなもの：花
 将来の夢：先生



ゼケルラーくん（5歳）1年
 好きなもの：車
 将来の夢：先生



ナエマちゃん（6歳）1年
 好きなもの：テレビ
 将来の夢：医者

「アフガニスタン 山の学校支援の会」への激励メッセージ!!

共同通信カブール支局通信員 安井 浩美さん



難民キャンプの少女ヌーリヤとのツーショット

祝!! 「アフガニスタン 山の学校支援の会」発足。
 23年間の戦争のせい、アフガンの子どもたちは、おとなよりも教育に対する意識が高いような気がしています。一人でも多くの子どもたちが学びのチャンスを手にする機会ができれば、こんな素晴らしいことはないと思っています。私もアフガンの未来を担う子どもたちに、皆さんと共に、カブールからできる限りのお手伝いをさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

「山の学校の会」を応援しています!!

1986年に出会ったブックレット『子どもの人権は今』の表紙の写真。イスラム寺院の庭に座って振り向いた少年の表情が魅力的で、今もはっきりと脳裏に焼きついている。この少年を囲むように数人の少年たちがノートを広げていた。私は、この写真を撮った人が長倉さんだとは、この時は知らなかった。

スクールの中を真っ裸で走るアマゾン少年の写真を見て、「ぼくもやりたい」とつぶやいた園児は、もう大学生になっている。

去年の5月、長倉さんのスライドとお話の会を幼稚園で持った。再開されたコソボの学校で、机は傾いていても、子どもたちは目を輝かせて学んでいた。私までうれしくなった。

長倉さんの写真を通して、美しいものが何なのかに気づかせてもらった。長倉さんの写真に出会うたびに「人間とは？ 生きるとは？」と、いつも問い続けて生きてきた。

多くの人に出会わせてもらった。生きていく喜びに気づかせてもらった。

今、日常の小さな一つひとつを大切にしたいと思う。「学ぶ」ことは、ただ一つなのかもしれない。



今村学園高槻幼稚園 園長
 山下 多香子さん

「長倉洋海さんの写真を見る会・札幌」の佐藤です。

長倉さんの写真が好き！ その一点で集まろうとの呼びかけで、会員は140人。2月27日から3日間写真展を開催し、併せて「アフガニスタン 山の学校支援の会」の手伝いをしようということで、チャリティープリントバザールを開きました。

宣伝、会場の釘打ちから値段つけ、展示、案内、販売、会計をオールボランティアでやりました。これはちょっとやさっとのことで、はできませんぞ。

3日間で600人近くの人が見に来てくれました。みんな幸せそうでしたよ。

写真パネルを何枚も買ってくれた絵本屋さんがありました。

「私ね、この子どもの写真がいいんですよ。この子を銃で撃てますかね。そんなことを思いますよ。だから飾ります」

これからも「山の学校」支援の輪を広げますよ。そして、アフガニスタンを私たちは忘れない、というメッセージを発信し続けようと思います。

「長倉洋海さんの写真を見る会・札幌」
 事務局局長 佐藤 広也さん

スラム名)が「私も手伝うよ」と言ってくれている。それも心強い。将来は、会で希望者を募って、学校を訪問できるようになればと思っている。

カブールで注文した机と椅子が届いたのは10日後、昼に着く予定が交通事故に巻き込まれ夜になった。一度は家に帰った子どもたちが、また集まってきてくれ

て、寒風の吹きさらす中、トラックによじ登り、荷のロープをほどくと、椅子と机を倉庫代わりのコンテナに運び込む。みんな、新しい椅子と机に興奮気味だ。

翌日、登校してきた生徒たちと教室に搬入。子どもたちが瞳を輝かせて「本当にありがとう。ありがとう」と私に何度も言う。先生が「大切に。傷つけてはい

けない」というと、皆が真剣にうなずいているのもうれしかった。新しい椅子に座った子どもたちに来春の再訪を約束して、ポーランド村を後にした。

長倉 洋海 ●写真家。1952年釧路市生まれ。中東、アフリカ、中南米、東南アジアなど世界の紛争地を訪ね、そこに生きる人々の姿を追う。92年「マストード 愛しの大地アフガン」で第12回土門拳賞受賞。

「山の学校の会」歩き始める

「ポーランドの子どもたちに、もっと勉強させてあげたい」

長倉洋海さんのそんな願いが、多くの人たちを巻き込んで動き出しました。

2月8日、東京は国立にある国分寺市ひかりプラザの会議室で、「アフガニスタン山の学校支援の会」第1回事務局スタッフ会議が開かれました。長倉さんのアフガニスタンの子どもたちへの思いに賛同し、何かを手伝いたいとその日集まったボランティアスタッフは19名。少し緊張した面持ちで、まずは自己紹介からスタートしました。

「仕事をリタイアした後、コソボでの学校づくりに関わり、教育の大切さを痛感している」「今まで募金などはしてきたが、今回をきっかけに直接支援に関わりたい」「特別なことはできないけれど、とにかくアフガニスタンの子どもたちのために何かしたい」

皆それぞれの胸の中に様々な熱い思いを持っていました。職業、得意分野は違っても、私たちには共通するものがあります。「長倉さんの写真が好き、そして、一緒に子どもたちを応援したい」

自己紹介の後、役員、会の名称、その他細かい役割分担を決めていきました。スタート時の緊張はどこへやら、時間の経過とともに皆だんだんと打ち解けてきたのか、活発に意見が交わされました。

途中、会の印鑑のデザインを決める時、「山の学校」だから、山の絵を入れたらどうですか」という意見が出され皆が賛成。ほとんどの人が三角形が連なった簡単な山

を想像していたところ、「そうですね、ヒンズークシの山は険しいからこんな感じで、そしてこの辺に雪が残っていたりして」とホワイトボードの前に立ち、ハンコが表現できる範囲を軽く飛び越え、とんがった山並とそこに積もる雪の絵まで描き始めた長倉さんに、皆の目が一瞬点：になったりもしました。が、NGOの運営に詳しい仲間からのアドバイスを受けながら会は進行し、第1回事務局スタッフ会議は予定を1時間近くオーバーしながらも無事終了。その後、会則、ニュースレター、ホームページなど各担当に分かれて打ち合わせをし、計4時間を越える熱き話し合いがなされたのでした。

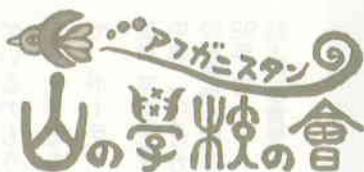
今年2月時点での会員数は、東京・約60名（昨年12月のチャリティー展での応募を含む）、札幌・約20名（長倉洋海さんの写真を見る会・札幌）を中心に、大阪・約50名と、合計130名程です。今後、現地での支援活動を順調に軌道に乗せていくためにも、会員総数200〜250名程度を目指しています。事務局としては、今後ホームページで活動を紹介したり、長倉さんの写真展のお知らせに当会の案内を入れてもらう形で支援の輪を広げていきたいと思っています。

年2〜3回の発行を予定しているこのニュースレターでは、事務局の活動報告のほか、ポーランドの子どもたちの様子も毎回紹介していきますので、彼らのとびっきりの笑顔と成長を楽しみに、10年間ともに歩んでいきましょう！（岩動紫・林道子）

「アフガニスタン 山の学校支援の会」は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パンシール渓谷ポーランド村の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月設立、以後10年間にわたり活動を続けていきます。



授業が終わり、家路につく子どもたち



〒187-0032
東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
アフガニスタン 山の学校支援の会
FAX: 042-345-7805
URL: <http://www.h-nagakura.net/yamanogakko>
郵便振替口座: 00160-1-667404
*お問い合わせはFAXでお願い致します。

編集: 岩動紫 小島崇広 佐々木瑞紀
林道子 三輪ほう子
題字・イラスト: 近藤理恵
印刷: (有) アドタック

第1回事務局スタッフ会議で決まったこと

正式名称・・・「アフガニスタン 山の学校支援の会」
通称・・・「山の学校の会」
役員・・・代表: 長倉洋海
副代表: 比留川征子・塩野剛志
会計: 森桂子・福地多恵子

活動内容

- ・年1回総会を開く。事務局の活動報告、その他長倉さんによる現地報告のスライドトークを行う。
- ・ニュースレター『翼(ばあーる)』を年2〜3回発行する。
- ・ホームページで活動の主旨や内容を随時紹介する。
- ・オリジナルプリント・チャリティーセールや関連イベントの開催。

*役員および各担当の任期は1年です。総会にて了承をいただく予定です。